



名取市史 第4号 どより

なとり市史企画展となとり市史講演会

市史編さん室では、年に1回、市史編さんの成果や現状を盛り込んだ企画展(なとり市史企画展)と、関連する講演会(なとり市史講演会)を開催しています。令和7年度は「民俗」に光を当てた企画展と講演会を実施しました。

「民俗」とは人々(「民」)の日々の暮らし(「俗」)を意味します。「民間伝承」とも呼ばれていたように、家庭や村の生活(「民間」)で伝わってきた知恵や工夫(「伝承」)が、民俗というものです。「伝承」という言葉のイメージから、特定の場所で世代を越えて受け継がれてきたことが注目されがちになりますが、民俗とは、古いものに限らず、いまのわたしたちの暮らしにあるものです。

そこで、令和7年度のなとり市史企画展では「自治体史と暮らしの記録」というテーマを設定しました。自治体史という、主に地方自治体が地域の歴史や文化を記録した本で、わたしたちの暮らし(民俗)がどのように扱われるのかを考える企画展を目指しました。

展示の目玉の一つは、川崎町での民具調査で宮本常一が残したカードと台帳でした。宮本は日本を代表する民俗研究者の一人で、特に昭和20年代から50年代にかけて日本各地を調査しました。宮本は、このカードと台帳という記録から、『川崎町史』(昭和50年刊行)に「民具と解説」を寄せています。

「民具」とは、わたしたちが日々の暮らしで使う道具のことです。毎日の暮らしで使う道具だからこそ、使う人の知恵や工夫が反映されやすいものです。そして、いま最新の民具調査として、宮城県民俗担当職員協議会(宮城民俗コモンズ)による民具のデジタルアーカイブ事業も紹介しました。市史編さん室も宮城民俗コモンズの発足当初から、その一員として活動してきました(このデジタルアーカイブはインターネット上で公開しています)。



笠原先生による講演会

さらに、企画展と連動して開催する講演会では、民俗・地域誌部会で市史編さんにご尽力いただいている笠原信男部長にご登壇いただきました。東北歴史博物館の前の館長でもある笠原先生は民俗芸能などにも造詣が深いのですが、今回は、市史編さんに伴って進めていただいている地域の石碑調査の現段階での成果を「路^ろ辺^{へん}の石碑にみる名取の暮らしの記録」と題して、お話いただきました。これまでのところ、笠原先生は1,255基の石碑を調査されており、なんとそのおよそ4分の1が馬頭観世音碑^{ばとうかんぜおんひ}ということです。農耕への馬の導入や展開、そしてその供養など、名取市での暮らしとの関係をこれから解き明かし、新たな『名取市史』に成果を反映していただくことが期待されます。



令和7年度の企画展



宮本のカードと台帳



デジタルアーカイブ
「宮城の民具」

名取市史最前線

令和7年11月1日、国際熊野学会創立20周年記念宮城県名取市合同大会「熊野三山が取り持つ縁」が、市文化会館中ホールを会場にして、開催されました。主催の国際熊野学会は和歌山県新宮市を拠点に活動する熊野の研究団体です。今回は、名取市史編さん事業を「縁」に、市教育委員会が共催し、名取市での大会開催となりました。



基調講演は、東北大学名誉教授の佐藤弘夫先生が「海を眺める神々—他界信仰と熊野—」と題して行いました。鎌倉から金沢に抜ける朝比奈に鎮座する朝比奈熊野神社からお話がスタートし、海や川を見下ろす風光明媚な地に勧請されている熊野神社には港を守護し、また海運を守護する側面があったのではと指摘されました。そして、そうした熊野神社に寄せられる人々の願いは、死後の浄土への往生にありつつも、

実は、人として馴染みあるこの世への再生でもあるのではないかという興味深い洞察をお話になりました。

続いて、国際熊野学会会員の谷口佳子さん、西浦康代さん、生熊みどりさんによる「熊野三山参詣曼荼羅」の絵解きを挟み、明治大学名誉教授の金山秋男先生と、東北学院大学教授の七海雅人先生によるセミナーが行われました。思想史の視点からの熊野信仰についてのお話、中世史の視点からの名取の熊野三山についてのお話には、その後のパネルディスカッションで多くの質問が会場から寄せられました。最後に、市内で活動する虹色マカロンさんによる「名取老女ものがたり」の影絵が上演され、大会の幕が下ろされました。

基調講演を行った佐藤先生には、市史編さんで名取熊野部会を取りまとめただいています。また、セミナーで登壇した七海先生にも同じく名取熊野部会でご尽力いただいています。様々な縁が重なり合う大会でした。佐藤先生や七海先生が描く名取の熊野三山は令和9年度刊行の巻でお読みいただけます。もう少しお待ちください。



佐藤先生の基調講演



熊野三山参詣曼荼羅の絵解き



パネルディスカッション



影絵「名取老女ものがたり」

名取市の魅力を再発見！

一笠島廃寺の柱跡—



笠島廃寺跡

令和6年度の調査では、令和5年度に確認した掘立柱跡と溝跡を中心に調査区を設定しました。掘立柱跡は東西および南北に列をなした、堀の柱跡であることがわかりました。さらに、堀の北西部の端が確認され、基壇を囲うように配置されていたと考えられます。掘立柱跡には重複がみられ、2時期にわたって建て直しが行われていたことが明らかになりました。遺物はほとんど確認されず、表土から少数の土器片のみ出土しました。

この成果は令和9年度に刊行予定の『名取市史 第1巻 通史編Ⅰ 原始・古代』に反映されます。ご期待ください！

この成果は令和9年度に刊行予定の『名取市史 第1巻 通史編Ⅰ 原始・古代』に反映されます。ご期待ください！

阿刀田 令造のこと

加藤 諭

(市史編さん専門部会[近代・現代]部会長)

現在、名取市では市史編さん事業を進めています。およそ100年前にも、郷土の歴史を研究し、その普及発展に努めた名取出身の偉人がいました。阿刀田令造という人物です。阿刀田は明治11年(1878)に名取郡下増田村(現在の名取市下増田)に生まれました。宮城県立中学校(現在の仙台第一高等学校)を卒業後、仙台に置かれていた旧制第二高等学校(現在の東北大学の前身校の一つ)を経て、東京帝国大学(現在の東京大学)に進学、西洋史を専攻します。さらに阿刀田は東京帝国大学を明治38年(1905)に卒業すると、今度は京都帝国大学(現在の京都大学)の法学部でも学ぶなど、学問に秀でた人物でした。阿刀田は学生時代を経て、明治43年(1910)に母校であった旧制第二高等学校の教授に着任することになります。

阿刀田令造先生の像
(金山平三筆、東北大学史料館所蔵)

阿刀田が旧制高校の教授に着任した当時、同一世代男子の人口に占める官立高校入学者は約1パーセント程度であり、旧制高校卒業者は、学科を選ばなければ帝国大学への進学がほぼ担保されていた時代です。旧制高校は当時のエリート養成機関であったといえるでしょう。阿刀田はその旧制二高で、西洋史担当の教育者としてのキャリアを重ね、教頭等の要職を務めた後、昭和7年(1932)、第9代校長に就任します。校長の任期を終えた後も、昭和22年(1947)に死去するまで、名誉教授として籍を置き、約38年の長きにわたって旧制二高の生徒を育て上げる人生を歩むことになりました。

阿刀田の教育者としてのエピソードで軍人殴打事件というものがあります。旧制二高生と軍人が酔った中で夜間けんかになったことがあり、軍人が後日校長官舎に押しかけてきたことがありました。阿刀田は蛮力な旧制二高の全校生徒800名も預かっていると、いちいち目が届かないこともあると煙に巻きつつ、軍人がけんかで抜刀したのかどうかを指摘、弱い立場の者を刀で威嚇するという、軍人にとって外聞の悪い点を責めて、事なきを得たといえます。こうした姿勢から阿刀田は生徒に好感を持たれる校長であったと言われています。

その阿刀田が教育者の傍ら注力していたのが、郷土の歴史研究でした。昭和5年(1930)に「仙台郷土研究会」を組織し、機関誌となる『仙台郷土研究』を刊行、仙台城絵図の研究や、近世における飢饉の研究などを進めていきました。その一方、数十年前のものであれば、豆腐の値段をつけた帳簿であっても貴重な歴史資料であり、婚礼や葬儀、お祭りなどの口承で伝えられているようなものも、後世のために記録に留めておく必要がある、といったように郷土の歴史研究とともに、保存しなければ失われていってしまう郷土の記録の重要性を当時から指摘しています。阿刀田のこうした指摘はまさに名取市史編さん事業にも当てはまる

阿刀田令造の略歴

明治11年(1878)	名取郡下増田村にて、下増田村長阿刀田義潮の長男として生まれる。
明治38年(1905)	東京帝国大学卒業後、京都帝国大学法学部に進む。
明治43年(1910)	旧制第二高等学校の教授に着任。
大正7年(1918)	名取郡誌編さん事業にて、本部委員長に就任。
大正14年(1925)	名取教育会編『名取郡誌』刊行。
昭和5年(1930)	「仙台郷土研究会」を組織し、委員長に就任。
昭和7年(1932)	旧制第二高等学校の第9代校長に就任。
昭和22年(1947)	病のため死去、下増田村東光寺に葬る。

※ 直木賞作家の阿刀田高は令造の甥にあたります。

ものです。単に過去の歴史を調査するだけでなく、名取の貴重な記録をしっかりとアーカイブし、その郷土の歴史資源を未来に繋げていくことは、名取市史編さんにおいて、欠かせない重要な役割と言えるでしょう。

資料のご提供を
お願いします

市史編さん室では、現在、歴史資料の収集を進めております。市の歴史は、行政の記録だけでなく、市民一人一人の暮らしの中に息づく「記憶」と、それを伝える「記録」によって形作られます。そのため、ご家庭で眠っている貴重な資料のご提供をお願いします。

<資料のご提供について>

事前に市史編さん室までご連絡ください。内容を確認の上、資料の借用・撮影・返却や寄贈などの相談をさせていただきます。ご提供いただいた資料は、必要に応じてデジタル化し、保存・活用させていただきます。

「これは関係ないかも…」と思われるものでも、市の歴史を知るためには大切な資料かも知れません。

<ご提供いただきたい資料の例>

- 写真：名取の街並み、地域のまつり、学校行事など
- 文書：地域活動の記録、団体の活動記録、地図や絵図など
- 出版物：地域限定の冊子、学校の卒業アルバムなど



増田神社の境内図
(荘司良子氏所蔵資料)



増田町商店地図
(山田照仁氏寄贈資料)



江戸時代に、神祇管領である京都の吉田家から授与された「神道裁許状」や、裁許状が入っていた菊紋・五七桐紋のついた箱、包紙、祝詞など。
(熊野本宮社寄贈資料)



名取の歴史に
触れられる場所
てんてんてんがる
～点点寺院編～

*明和9年(1772)に完成した『封内風土記』や、安永年間(1772～1781)に書き集められた仙台藩領内の各村の『風土記御用書出』(「安永風土記」)には、名取郡内にある寺院の宗派・山号・寺号・縁起なども記録されています。この図には、上記の歴史資料に確認でき、現存している寺院のみ掲載いたしました。

